

目をこらして (15)



ものすごい風が吹いた日のこと。

昼食前の片付けの途中にS君がビニール袋とばし（とい
うか風集めのような遊び）を始めた。

あまりの面白さと宣伝上手のS君の力により、片付けの
後にみんなで風集めで遊ぶことになる。風を思い切り味
わって遊ぶこと数十分……。満足満足でお昼になる。

子どもたちはお弁当を食べ始める。私も職員室にお弁当
を取りに行き戻ってくるとB君が「せんせい！ さっき煙
突からいったい煙がでてたよ！」と教えてくれた。

S君とY君は、隣り合わせて座りながら「何だかこわい
みたいな音だね」「あ、また聞こえた」「こわくて食べられ
ないよね」と言いつつ顔を見合わせて耳をふさぐ。

窓はしっかり閉まっていたけれど、風のすごいねりが
子どもたちに迫ってくるようだった。

そのうちS君が「ねえ、あとで木の下を探検しようよ」
と言いだした。

私が「それじゃあ、早くお弁当を食べちゃわないとね」
と言うと（この二人は本当にのんびりとお弁当を食べる人





耳をすまして

たちなのです) S君が言った。

「うん、ぼく、耳にカギかけとこ、パタン！」

それを聞いて、Y君も言った。

「ぼくも！」

そんな二人のやりとりをお弁当を食べながら聞いていた

N君がぼそつと言った。

「それはね、耳あかつて言うんだよ！」

外は、相変わらずの、風、風、風……

*

風の音を聞きながら、こわいようだと思ったり、あとであの木の下に行ってみようと思ったり、それは風の中で遊んでいた時には感じなかったことだ。

風は、今、生き物のように外で暴れ回っている。

ゆっくりお弁当を食べ、風の音を聞きながら、子どもたちは心の中で風を感じている。体で感じたこと、心で感じたこと、それを子どもたちは言葉にする。

強い風が吹くと、私はS君たちのことを思い出す。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)

